香西資村とその時代

藤井公明

香西資村については『南海通記』『香西記』などに、僅少の資料があるが、必ずしも正確ではない。『南海通記』に、

氏祖藤中納言家成卿ノ孫、藤大夫資光元暦中ニ平氏ヲ捨テ源氏ニ参リ、氏族二千餘人ヲ率ヒテ忠戰ヲ遂シカバ、鎌倉殿ノ御家人ト稱シテ、讃州綾ノ郡ノ守護職ニ補セラル、資光ノ三男藤三郎資村、承久兵乱ニ関東ニ忠アル故ニ香河郡ノ守護職ニ補セラル。

とある。

守護・地頭の稱呼は、頼朝時代から多少変遷しているようだが、承久の頃以後は、一国の支配者が守護で、郡・郷・庄・保の場合は地頭と呼ばれている。当時の讃岐の守護は、鎌倉在住の豪族三浦氏で、当地にはその代官が来ていたようである。資村はその代官を助けるべく、綾・香川二郡の地頭に任ぜられたと言うべきであろう。

承久の兵乱とその前後

承久元（一二一九）年正月二十七日の夜、ふりつもる雪の中で、三代將軍源実朝の右大臣就任拜賀の式が、鶴岡八幡宮で盛大におこなわれた。そしてその帰途石段を下った時、実朝は、樹陰から「親のかたき」と呼ばわって、とび出してきた一法師に討たれた。それは兄頼家の忘れ片身で、当時八幡宮の別当職についていた甥の公暁であった。彼はその後三浦義村の館に逃げこんだが、やがて執権北条氏の手で殺された。当時の鎌倉には複雑な陰謀が渦まいていたようである。

これより先、北条氏が鎌倉で覇権を握るまでにはさま〳〵な兵乱があった。

正治二（一二〇〇）年に梶原景時が討たれて間もなく、元久元（一二〇四）年には二代將軍源頼家が殺され、その時義父比企能員の一族がみなごろしにされた。

さらに元久二（一二〇五）年には畠山重忠が殺され、建保元（一二一三）年には侍所別当和田義盛とその一族が殺されていた。三浦義村もその時和田義盛と盟約を結んでいたが裏切ったと言われている。

そんなわけで、実朝が殺された頃、鎌倉武士団の中には、三浦一族をはじめとして、北条氏に対する疑心暗鬼のようなものが渦まいてい

たのである。

朝廷の公権と武士たちの持つ武力との抗争はすでに平清盛以来の問題であった。頼朝は上京して位官を求める代りに、鎌倉にあって武士団を統率しようとした。平家を討ち、義経を亡ぼした後、御家人制度をとって、再び反乱する分子を根絶しようとした。

御家人とは幕府直属の武士である。彼らは戦功によって、いくらかの私有地を保証されていた。これがいわゆる「一所懸命の土地」である。その他に頼朝は各地に地頭をおいた。これは治安のためと称して警察権と徴税権を与えられていた。しかし徴税は、国司や荘園主の代理として行うので、地頭はその手数料として若干を受取るのである。そしてこれらはすべて朝廷の認可を得て行われたのであるが、武力を持った地頭たちの中には荘園領主をおびやかすものもあって、後鳥羽上皇をはじめ、貴族（荘園領主）たちの間には、武士の権力が公卿たちの生活をおびやかすのを不快に思うようになっていた。

実朝の死後、北条義時は、朝廷に願って皇族将軍を迎えようとしたが、後鳥羽上皇は許されなかった。結局、頼朝のゆかりで、九条関白道家の子当時二才の頼経がきまった。

かくて承久元（一二一九）年六月、頼経は鎌倉将軍として下向した。

このように二才の将軍は下向したが、北条義時の権限は強まるばかりで、北条氏以外の鎌倉武士たちは、不安を持つものも多く、その噂は後鳥羽上皇の耳にも達するようになった。

承久三（一二二一）年五月十四日、後鳥羽上皇は鳥羽離宮に、諸国の兵を招集した。北面西面の武士、これらは多くは畿内・近国の守護・地頭・御家人などからさし出された京都守護の武士たちであったが、これらの武士に、さらに畿内・近国、在京中の武士たちが加わって、その数は千七百余騎と言われている。

本来幕府の出先機関であった京都守護職二人のうち、大江広元の子親広はこれに応じたが、これに応じなかった伊賀光季は殺された。光季は北条義時の義兄弟であったからである。こうして六波羅にいた幕府方の兵の多くは宮方に参加したのである。

親幕派とみなされ、幕府との戦争を好まなかった西園寺公経・九条道家らはしりぞけられ、上皇側近の人達ばかりで計られた。なお注目すべきは、討幕ではなく、幕府の専横者北条義時追討の院宣がくだされたことである。

これは上皇の側近には、かなり多くの反北条の武士たちが集まっていたからである。例えば鎌倉の豪族三浦義村の弟胤義がいた。胤義は、義時追討の宣旨と同時に、宣旨に従えば恩賞は思いのままに取らせるぞという副状を持った使者をさし出せば、兄義村をはじめかなり多くの鎌倉武士が呼応すると進言している。

実際、義時追討の院宣は、在京の御家人や畿内近国の守護・地頭・御家人たちをも動かして、京方に参加させようとする気配を生じさせたようである。東国の武士たちの中にも、かねて北条を憎む人達が多かったので、一時は動揺があったようである。

この時尼将軍政子がたって、義時追討の宣旨は、故頼朝公の作った武家政治そのものを否定しようとする策謀であると叫んで、義時以下を励ましたので、鎌倉武士団の反撃の意志が定まったと言う。

結果、宮方の軍をむかえ討つと言う守勢論が陰をひそめ、急遽西上して上皇周辺の野心家たちを掃討すべしと言う、強行論が勝を占めたのである。

相模守北条時房、武蔵守北条泰時を将とする東国勢の進撃は早かった。他方宮方の西国勢には、天下の諸兵を統率する武将がいなかったので、各地で小さな抵抗を試みたがむだであった。宣旨が出されてから一ケ月後の六月十四日には、すでに東国勢は京都に乱入していた。

宣旨をうけて、はせ参じようとしていた西国の武将たちもあったが、彼らが都に参上する前に、既に勝敗はきまっていたのである。泰時・時房の二人は京都に止まって、戦後の処置にとりかかった。近国、西国の武士たちの中にはかなり多くの者が、宮方に呼応したからである。泰時らはくわしく調査して、きびしく処分し、彼らに代って東国武士の戦功のあった者を、その後に封じて、以後の幕府の支配力を強化しようとした。

乱後の讃岐

この承久の乱の時、讃州藤家は二派に別れた。西の豊田大夫貞重をはじめ、羽床重員らは、院宣に応じたようである。『南海通記』の承久兵乱記の項をみると、伊予の河野入道が宮方に加わり、誘われて隣国のよしみで、豊田郡司柞田大夫貞重とその一族が参加したと書いてある。これは藤左衛門尉資光の兄重高の一統であった。

しかし資光の一統は新居次郎資村（南海通記は三郎）を中心に関東に候したのである。『香西記』には、

此時讃州藤家豊田大夫貞重は、院宣を蒙、讃州の兵士を催し京方に参。其罪に依、所領を没収せらるゝ也。新居次郎資村は、関東に候し、恩賞として、阿野・香河の二郡を賜て領し之、香西左近將監資村と號也。豊田郡を下總國住人香川五郎に賜、大内郡を同國住人安富氏に賜る也と云々。

とある。

このように西国の、京方に味方したものゝ領地は没収せられ、武功のあった東国武士に与えられた。讃岐にも下総の住人香川氏が豊田郡に、安富氏が大内郡に、それぞれ地頭として任命されたのである。

しかし、新居次郎資村が関東に候したのは、おそらく泰時らが京都に到着した後であろう。兵をひきいて伺候し、忠誠を誓ったのであろう。では何故に資村は院宣に応じなかったのであろうか。これは彼が地頭に任命されると間もなく、九条家の荘園だった笠居郷佐料に地頭館を築いたのと何か関係がありはしなかっただろうか。

『香西記』によれば

笠居郷佐料と云地名は、綾氏系譜に曰、上代綾君代々上居（カサ）に住し、帝都に大番の役を勤る時、在洛の武士多故に國の一字に氏の一字を添て、讃綾と召されし也。是則居處の地名となりて、後用ひ易きに随て佐料と書也云々。

とあり、また新居家所蔵綾氏系譜には、

（代々住香西上居）
貞清――行隆――貞宣――高季
　　└女
　　藤原家成═══章隆

となっているが、章隆が讃岐藤氏の始祖である。

笠居郷が何年頃から関白九条家の荘園になったかは不明であるが、佐料に住んでいたと言う綾氏は、そこが荘園となった時には、当然そのまゝ庄司となって九条家に仕えていたはずである。

そして、資村が新居に住むようになった時、彼はその綾氏に替って、隣りの荘園の庄司となって九条家に任えていたのではないだろうか。すると前にも書いたように、承久元年六月には、九条道家の子、当時二才の頼経が、鎌倉将軍として下向していたのである。だから資村の行動を支配する者は九条道家で、院宣ではなかったのである。

こんな推定が成立すれば、すべてが理解できるわけである。何故ならば資村の御家人としての所領は新居郷であった。だから彼が地頭となった時、地頭屋敷は当然新居に造られるべきである。それが何故九条関白家の荘園の佐料に作られたのか。これは長い間私の疑問だったからである。地頭となる前にすでに九条家の庄司となって仕えていたとすれば、地頭屋敷が九条家の了解を得て佐料に作られても不思議ではないだろう。

北条泰時の時代

北条泰時が京都に残って、戦後処理に専念していた時、元仁元（一二二四）年、父北条義時が六十二才で急死した。その直後、鎌倉では、義時の後継者をめぐって騒動が起った。義時の後妻伊賀氏は、実兄の伊賀光宗とはかり、三浦義村をだきこんで実子の政村を執権に、また娘婿の貴族一条実雅を将軍に立てようとした。実雅は源頼朝の妹が、一条能保に嫁して産んだ子であった。

しかしこの時は尼将軍政子がのり出して義村を説得して事なきを得た。泰時は京都からいそぎ帰国して執権職についた。

三浦義明
├義澄
│　├義村
│　│　├泰村
│　│　└光村
│　└胤義
└義宗――（和田）義盛――義秀

三浦義村は当時鎌倉における最強の豪族であった。和田義盛の乱の時にも最後に和田を裏切ったと言われており、実朝を殺した公暁が救けを求めて馳けこんだのも義村の屋敷であった。承久の兵乱の時も弟胤村が、後鳥羽上皇方に居て院宣をもった特使がきた。つまり彼がどちらに味方するかで北条氏の存亡が左右されるほどの勢力をもっていた。

そんな状況の中で泰時は執権についたので、さっそく京都にいた叔父時房をも呼び返し、彼に並ぶ執権の地位にむかえた。また三浦義村らの有力御家人十一人を選んで評定衆と呼び、幕府政治の集団指導体制をとった。

貞永元（一二三二）年には五十一ケ条の貞永式目を完成した。御成敗式目とも呼ばれ、それは幕府の基本法典であった。そしてその三条から六条までは、諸国の守護・地頭の職務や、幕府と朝廷・庄園本所との関係を規定したものであった。つまり守護・地頭の武力がゆきすぎることをふせいだのである。

鴨長明の『方丈記』も語るように、打続く戦乱と飢饉は、しばしば庶民を飢餓状態に追いこんでいた。執権北条泰時は、自己の管内はもちろん、他の守護・地頭たちに対しても、それぞれの管内において、荒地の開発や産業の振興に留意するよう勧めている。

香西資村の土木事業

香西資村が、阿野・香河二郡の地頭に任ぜられたのは、多分貞応元（一二二二）年頃であろうが、その時彼は三十三才であった。しかし、笠居の佐料に地頭屋敷を完成したのはいつかわからない。荘園領主九条家の了解も必要だっただろうし、それに作法に従ってはじめて作る約一町歩の方形の武家屋敷であるから、地勢や方位の選定も必要だっただろう。その結果旧領の新居郷よりも佐料がよいときまったのであろう。背後には秀麗な勝賀山をひかえ、前には美しい海が洋々と拡がっていて、その海は遠く都にもつながっていたのである。佐料に地頭館が造築されて、間もなくの事であろう。藤家の武運の守護神として宇佐から分社を勧請して、それを山口の藤尾の原におまつりした。そこは新居の旧居と佐料の新館の中間であった。この宇佐神社勧請は嘉祿年中（一二二五 ― 一二二七）と伝えられているから、佐料館の新造は、その前年の元仁元（一二二四）年頃であろうか。資村三十五才である。鶴が岡八幡宮は岩清水八幡の分社を勧請して鎌倉の守護神としているから、資村もそれにならったのであろう。

次に地頭となった資村が何をしたかを考えて見よう。しかしその前に資村時代の笠居の海を考えて見よう。

『香西記』に（寛政四（一七九二）年記）

香西海濱昔物語に曰、夫藤尾山は、昔磯崎山と云て、景絶の地也。此西北、平賀と云浦の海濱より、連綿と磯崎山の東南を経て、作山の北東より、巽に遶り、内間の渚を艮に回遶して、観音崎に至る蓋有弦打山之北於靈窟。自往古安観音。故曰観音崎也。後寛文・延寶中之近年也、齋藤氏竝安藥師尊像也。故後稱之於穴藥師也。皆石像也。入海の岸打波も穏に、眺あり。魚貝頗多し。云々。

とある。

昔物語とあるが、昔とはいつの事だろうか。文中の磯崎山や作り山やが、それぞれまだ西方の丘陵に続いていた頃だとすれば、承久元（一二二〇）年頃の海と考えてもよいであろう。

その頃海は磯崎山の北から東に、更にその東から南にめぐって作り山との間は入江になっていたのである。つまり現在の香西小学校や幼

稚園の附近は海だったわけである。作り山の東も、南の現在の薬師山の下も海で、その海は現在の一本木附近に及び、そこから海岸線はさらに東にのびて内間の渚にたっしていたのである。それが原文の「作山の北東より巽に遶り、内間の渚云々」に相当するわけで、今の西うちの水田地帯は海だったのである。文中の内間の渚は、その昔香河（香東川）の水が土砂を流して海中に作り出した平陸の地であった。そしてその内間の渚から海は北東に回遶して（まわって）、現在の郷東の山端に達していたのである。そしてこの大きな入江は波も穏やかで、景色も美しく、魚貝が頗る豊富であったと言う。

なお文中の内間の渚については、『香西記』に、「内間古城迹の記」がある。

それによると、文安・宝徳の頃（一四四四――一四五一年）、香西元資がそこに内間城（内間屋敷とも呼ぶ）を築いて、京都方面に物資を送る拠点としたらしい。そしてその城の巽（東南）は湖水になっていて、魚や水鳥が遊んでいたとあるから、飯田川の下流はせきとめられて湖水状になっていたのである。その湖水とは、佐料から現在の「三軒家の橋」を渡って東に出た時、東方に見える低い水田地帯である。そしてその西北に当る高地が中間城の所在地になる。その頃は本津川はまだ作られていなかった。あったのは飯田川でその西側の堤防には竹を植えて決壊を防いでいた。今竹林の名が残っているが、昔は現在の本津川の河流になっている所が西の堤防（竹林）だったのである。

文安の元資の頃は、承久の資村をさる二百余年であるが、元資の頃よりは資村の頃が、海がもう少し内陸部まで浸入していただろう。そして資村が地頭になった頃は飯田川も整理されず、下流は自然にまかされて、大石小石が散乱して、荒地のまゝだったのではないだろうか。なぜならば、河川は昔から自然がつくる村の境界であった。両つの郷の上に立つ勢力が現われるまでは、河川の下流は荒地のまゝで、共有地として野放しにされ勝ちなのである。つまり海が後退して河川が作りなした砂礫の土地、それが本来の飯田郷と笠居郷の中間デルタであっただろう。

それが資村が地頭になった時、彼はこのデルタ地帯の東の方に川を制御して飯田川を造り、その西側に笠居郷の新田を作ったのである。彼が新居の御家人であった時にはそんな事はできなかった。しかし今や彼は、阿野香河二郡の地頭となり、近隣に並ぶもののない勢力を握ったのである。

それに鎌倉の執権北条泰時は、荒地の開拓を叫んでいるではないか。若い資村はこれに力を得てやったにちがいないと思う。勿論これは文献には残っていない。しかし資村以前にこんな大工事をやってのける者は誰もいなかったはずである。下流のデルタ地帯がすべて笠居郷に編入されたのは、笠居郷側に支配者資村が住むようになったからである。

また前記「内間古城迹の記」にもあるように、飯田川の下流は、水がせきとめられて湖水状をなしていたということは、この飯田川が常にかなりの水量を保持していたことを物語っている。

現在この上流の落合（鬼無町鬼無）には、古川が流れ込んでいる。これは、その昔、安原附近から香河（現香東川）の水が飯田川に導入されていたので、その合流点が落合であった。その昔香西氏が水の支配者だった頃は、かなりの水量がこちらに注がれていたはずで、飯田川の水量も豊かで、落合から内間までは、小運河で、小舟や筏も流され、物資も運ばれていたのではないだろうか。

私がそんな想像をするのは、何のために湖水が造られていたのかと考えた場合、それは河の水量を増して水位を高めるためだと思われるからである。さらに香西氏が文安の頃になると、京都に大兵を駐在させなければならなくなっている。香西元資は管領細川勝元の四天王の第一で、後の応仁（一四六七――）の乱の立役者であった。

その元資がこの内間に屋敷をつくったのは、奥地からの兵糧や物資をここに集め、ここから上方に船積するためだったのだろう。そしてそれは、ここが、その前から、二百年前の資村の時から、奥地物資の集積地として造られていた小運河の終点だったからであろう。そしてこの飯田川の豊富な水は、さらに笠居新田のための水でもあったはずである。

それが、時移り世が替って、生駒氏松平氏の時代となると水の支配者がかわり、水流もきりかえられ、香河からの取水量も減少して空しい古川の名のみが残り、飯田川の湖水も消えて、水あせた本津川が本津に向けて流され、その両側に新田が開拓されたのは、松平頼常の貞享（一六八四―一六八七）の頃であった。

なお資村の新田開拓について言えば、佐料館がつくられた頃のことと思われるが、館の南方に泉保池がつくられたようで、これは館の南の防衛をもかねていたようである。そしてその水源は、現存している水利関係から逆考すると、上の萩の谷からも、南上の地獄谷からも、さらに南方の衣掛の方面からも、泉保池に水が導入されるようになっていたようである。つまりこの池は、防衛と水利をかねた細長い池で、下流には若干の新田も作られたのだろう。

最後に資村晩年の土木工事かと思われるものに、海辺の道があった。作り山と磯崎山の西側をきり開いて、その土を利用して造った道である。佐料の館から海岸沿いに是竹山（現薬師山）の麓を通り、作り山と磯崎山の西側を通って平賀の浜で北の海に出る道であった。この道が必要になったのは、香西氏の漁業が水産業として大発展をしたからであろう。

香西氏の水産業と水軍

前に引用した香西海濱物語にもあったように当時の笠居の海は魚貝類の宝庫であった。そのためか笠居郷は早くから伊勢神宮の御厨（みくりや）でもあった。

神鳳鈔曰。讃岐国笠居御厨。

内宮六、九、十二月、毎祭十五日饗料所。

となっている。御厨とは神前に供え奉る贄（にえ）の魚貝を調進する所であった。出来るかぎり巨大な魚や貝をとって、それを干物または塩物にして年三回伊勢神宮に御供物として送り届けたのであろう。この神鳳抄

は嘉元（一三〇三―一三〇五）頃の作だから、その頃の事を書いたものだろうが、笠居郷が御厨に選ばれたのは、九条家荘園とともに遠く平安時代にさかのぼるものと考えられる。

しかし、いかに魚貝類が豊富でも、自然にまかされていたのでは、それは宝の持ちくされのようなものであった。これを大量にとって干物にするとか塩漬けにして、食料不足の続いていた都にでも送り出せば売れることは間違いない。だがそんな大規模なことを企てる企業はまだ讃岐には発生していなかったようである。

資村はこの漁業に注目したようである。そして伊勢の御厨にふさわしい郷として、館の西北の岡に伊勢神社をお祭りした。この附近からは、今でも昔の魚具が多く出土しているから、あるいは神宮に供物として奉る贄の魚貝を調進する責任者のような者がその附近に住んでいたのかも知れない。

しかし資村の漁業振興は、もう少し大きなものを同時に考えていたようである。それは水軍の養成である。当時瀬戸内海には海賊が横行していた。阿野・香河二郡の物産を都に送る場合でも、或は守護代理を助けて讃岐の物産を都に送る場合でもその責任者は地頭であり武将である資村であった。

資村は水軍の養成と漁業の振興を一丸として考えたようである。そのために新居郷の一族郎党の大部分を北方海岸に移したのであろうか。それを証明するかのように、神高の藤尾原に祭っていた氏神を磯崎山の頂上に遷宮した。

また、それと前後して住吉神社を勧請している。この神は記紀の時代から海上守護の神として知られ、万葉時代には遣唐使が航海の安全を祈った神であった。つまり、これは漁業の神であると共に航海の神であった。

『南海通記』に

北濱ニ住吉大明神ヲ勸請シ奉ル事。既ニ江西三浦ノ者共申テ曰、住吉大明神ハ海上擁護ノ御神也。柴山ニ勸請スベキ由ヲ申上ル。資村曰柴山ハ險要ノ地ニシテ三浦ノ寶也。（中略）此山ヲ要害トシテ守兵ヲ措ク時ハ海賊ノ難ナキ故ニ、諸州ノ廻船氣遣ナクシテ船繫ス。是ニ依テ旅客ノ宿所繁昌シテ、諸人安居シ三浦富貴ス。コヽヲ以テ見之、此山ハ三浦ノ寶也。住吉大明神勸請ノ志アラバ、深際ノ山可然也。神ハ敬シテ又遠ザクベシトアレバ、人家ニ近ク馴侮ベカラズト有テ、三浦ノ者共ニ課シテ造營ヲ結構シ、遷宮ノ形粧ヲ刷ヒ祭祀ヲ執行ス。（下略）

とある。

この『南海通記』の説は、後世の人が考えた詭弁である。三浦とは、本州と中須賀と平賀をさすのであるが、資村の頃はまだ漁業がはじまったばかりであり、芝山は北方海中の孤島であった。

前に引用した「香西海浜物語」にもあったように、平賀の浦から磯崎山にかけて、北方一面海だったのである。そして住吉の入江も後の植松屋敷の下あたりまでが海であった。そしてそこには地形からすると海上を管理する軍船がひそんでいたと考えてもよさそうである。

資村が歿した嘉禎元（一二三五）年から約十年の後、『吾妻鏡巻三十

七』によれば、

寛元四（一二四六）年三月十八日。丁未。讃岐國御家人藤左衛門尉搦二進海賊一事。彼國守護人三浦能登前司光村代官。注申之間。六波羅又被二執申一。仍有二沙汰一。神妙之趣。殊及二御感一之由。可二仰含一之旨。被レ仰二六波羅一。云云。

とある。

これは鎌倉の記録であるから、海賊を捕えたのは、旧歴の二月の末か三月の始め頃であろう。時の執権は北条経時であったが病弱だったので、弟の時頼が執権職を代行していた。

讃岐の守護三浦光村は、在鎌倉の有力御家人三浦義村の子で、当時、評定衆の一人であった。それでその代理人が来て、府中附近にでも駐在し、東の安富、阿野香河の香西、西の香川の三人の地頭がこれを補佐していたのであろう。

香西氏は二代左衛門尉忠資の時代で、その時彼は三十九才であった。

『南海通記』は、系圖では三代資茂の時となり、巻之廿一の「老父夜話」では、「藤ノ左衛門家資」の時となっていて、世代を間違えているが、とにかく事件のあらましを、勘案すると次のようになっている。

香西軍は二手に別れて、東は手島（豊島）、西は比比（日比）の二方面から、賊を中央海上に追出し、包囲して討ち取り、捕虜百余人を捕えたが、その首領は京の上臈だったという。おそらく承久の乱で不遇になった公家や武士の子孫が中心になっていたのであろう。

忠資は、その捕虜百余人をひきつれて、京の六波羅に参上報告したので、そのしらせが鎌倉殿に達し、三月十八日執権から沙汰があった。

大手がらであった。将軍家も御感心なさって、しかるべき恩賞を考えてやれとのことであったぞと六波羅から伝えさせた。

とある。

その結果、今後讃州諸島の警衛を命ずるとの仰事が六波羅から伝えられた。香西氏は早速一族を直島と塩飽島に配置して、備讃瀬戸の海上をかためた。そしてこれは同時に海上の漁業権を確保することにもつながっていたのである。

初代藤左近将監資村が新居の単なる御家人だった頃は、彼は一せきの舟も持っていなかった。しかし彼が地頭となった時から、水軍の養成に着眼したのである。彼の死後十年にしてそれは成功した。以後香西氏は瀬戸内海の一隅を支配する海の豪族に成長して、後の天文・弘治の頃（一五三二―一五五七）には、西の大三島の村上衆と結んで、大明国や朝鮮にまで、勇名をはせる海の男たちの一人にもなったのである。

結び

『香西史』（昭和五年）には、

資村、嘉禎元年（一二三五）七月七日歿ス。

年五十三、法名了原。

とある。また宗旨については、

資村貞應元仁ノ頃ニ香西寺ヲ再建立ス。以來同寺ノ大檀越トシテ、眞言宗ヲ信ゼシモノノ如シ。同家代々ノ墳墓モ同寺内ニ建テラレタリ。同寺

ヲ元資ガ本津ニ移セシヲ、更ニ又寛文年中ニ源英公ガ現在ノ地ニ移サレシ爲、自然墳墓保存ノ方モ講ゼラレズ、爲ニ今ノ世ニ滅却セラレシナランカ。

とある。また香西寺再建については、

香西寺縁起に

讃州寶幢山香西寺地藏院ハ行基菩薩ノ開基、其後又弘法大師ノ再基ナリ。

（中略）

八十五代堀河院御宇貞應元仁ノ年間、頼經將軍ノ命ニヨリ、香西左近將監資村堂塔坊舍ヲ再建シ香西寺ト改ム。

其後文和年中尊氏公ノ命ニ依テ、細川頼之公再建。

其後百三代後花園院御宇文安五年細川勝元公ノ命ニ依テ、香西備後守元資奥ノ堂ヨリ本津ノ里ニ引移シ再建シ、地福寺ト改ム。香西家数世ノ歸依靈場ナリ。（後略）

とある。（○点筆者）

貞応元仁（一二二二―一二二四）の年間とは、資村が地頭に任命され、佐料に館を築いた頃である。その頃笠居の荘園領主であった九条道家公の内命を受けて、幼い将軍頼經の武運長久を祈って、勝賀寺を再建し、香西寺と改名したのである。

このように資村は、常に鎌倉将軍にも忠たらんとし、また九条道家や伊勢大神宮にも崇敬をつくして家人に範を示したのである。彼にとって神佛は末法の世を照らす光明であった。

『南海通記』は、この資村のことを、

（前略）伊勢八幡住吉何レモ劣ラズ、修造シテ渇仰有ケレバ、諸人歩ヲ運デ、繁昌スル事限ナシ。資村其質質朴ニシテ、神ヲ敬シ君ヲ仰ギ、衆人ニ悖ラズシテ交和セシカバ、子孫日々に昌へ、門葉永ク傳り、盡ル事ナカラム。夫分内狹迫ナリト云へ共、奢ル事ナケレバ、賦斂ヲ薄シテ凡民ヲ安ンズ。故ニ本津商人見セ店ヲ賣リ、京境ノ器物ヲ集テ交易ノ利潤ヲナシ、平賀ノ浦ニ廻船ヲ繋デ、旅客ノ住來止事ナシ、中須賀釣ノ濱ノ漁父苫屋ヲ置テ、漁船沖ニ列ス。（下略）

と書いてある。

「故ニ本津商人以下……」は、この初代資村のとった治政が功を結んで、後世香西氏及び香西の浦が繁昌したさまを書いたものである。

しかし資村その人の時代は、「夫分内狹迫ナリト云へ共、奢ル事ナケレバ、賦斂ヲ薄シテ凡民ヲ安ンズ」とある。阿野香河二郡の地頭職として徴税権をもっていたとて、その税の大部分は、国司庁又は荘園領主に収めて、地頭はその何割かの手数料をもらったにすぎない。その手数料とても、実際の仕事は一族郎党がするのだから、彼らの分け前を考えてやらなければならぬだろう。それに郡内には他姓の豪族もいて、その人達の協力も徴税の時には必要だっただろうから、かなり分け前を渡していただろう。そんなわけで、資村自身の取り高は、ごく僅かであっただろう。それを「分内狹迫ナリト云へ共」と言ったのだろう。

かなり大きな土木工事をしているが、それは水田の開拓とか、漁業の振興につながっていたので、庶民は喜んで参加したのであろう。

伊勢、八幡、住吉の三社を修造しているが、それらは資村の身にあまるほどの豪奢なものではなかったようである。氏神の宇佐八幡にしても、磯崎山に移した跡には、今古宮神社が残っているが、境内の広さから考えても、最初はささやかな神社であったらしい。伊勢も住吉も、社殿はささやかなものだったらしい。「賦斂ヲ薄シテ凡民ヲ安ンズ。」とあるように、資村の願いは信仰そのものであって、外観ではなかった。

「資村其質質朴ニシテ、神ヲ敬シ君ヲ仰ギ、衆人ニ悖ラズシテ交和セシカバ、」とあるが、西の香川も、東の安富も、そして守護も、皆東国の武功者ばかりの中にあって、一人地元出身者として、讃岐国の中央に位し、國府庁にも近く、守護代理にも近く、円満に治政に勵んだのであろう。

水軍の養成にしても、漁業振興にからましていたようである。漁業で得た収入で大船を作り、漁業の指揮命令者が一族の有力者で、一朝事ある時は、彼が漁師たちをも引つれて一軍の将となるのである。彼は住吉の入江の奥深くに居住し、この入江の端には、水軍の神、住吉大明神が祭られていた。これは資村がいだいていた夢のような理想だっただろう。そこが後の植松屋敷である。

しかし彼の子孫たちはこの理想を忘れて、室町時代になると、立身出世の夢を追うて、都あたりの戦争に明けくれたのであった。もし大三島の村上水軍のように、水軍一筋に生きていたならば、この住吉神社も東の大三島神社となって繁昌していたかも知れない。

高松短期大学研究紀要

第　11　号

昭和56年3月1日印刷
昭和56年3月10日発行

編集発行　高松短期大学
〒761-01 高松市春日町960

印　刷　新日本印刷株式会社
高松市木太町2158